京都大学 大学院教育学研究科／教育学部

43
2021.12

News Letter

Graduate School of Education

福岡県立京都高校との交流

巻頭言 2
南部　広孝　副研究科長

研究ノート 3
[教員から] 髙橋　雄介　教育認知心理学講座 准教授
[院生から] 松本　知香　博士後期課程2回生
[社会人院生から] 田添　茜　修士課程2回生
[留学生から] 馮　可欣　修士課程1回生

活動報告 5
[附属臨床教育実践研究センターから]
岡野　憲一郎　附属臨床教育実践研究センター長
[教育実践コラボレーション・センターから]
服部　憲児　教育社会学講座 准教授
[グローバル教育展開オフィスから]
高山　敬太　グローバル教育展開オフィス　室長

トピックス 6
「日本型」教育文化・知の継承支援モデルの構築と展開プロジェクト
齊藤　智　教育認知心理学講座　教授

E.FORUMの取り組み 7
西岡　加名恵　教育・人間科学講座　教授

国際交流事業 7
高山　敬太　グローバル教育展開オフィス　室長

事務室から 8
廣中　理絵　事務長
奥村　悠人　教務掛員

図書室から 9
中尾　佳樹　図書掛長

大学院・学部学士入学　入試説明会 オープンキャンパス2021 9

令和3年度教育学研究科長賞・教育学部長賞 10
受賞者　高野　了太　博士後期課程3回生
松岡　巧　教育学部4回生

諸記録 10
・人事異動　(2021.5.1 ～ 2021.10.31)
・主な出来事　(2021.4.1 ～ 2021.10.31)
・外部資金受入れ　(2021.4.1 ～ 2021.9.30)

諸報 12
・新任教員紹介
・訃報

教育学研究科・教育学部基金 12

京都大学 大学院教育学研究科ロゴマーク

このロゴマークは、京都大学学術情報メディアセンターの元客員教授・奥村昭夫先生のデザインです。奥村先生は、ロート製薬、グリコ、牛乳石鹸などのロゴマークやパッケージなどを手がけた著名グラフィックデザイナーです。本研究科・学部の「育ち」「つながり」「先端」といったキーコンセプトをもとに、教育学部本館の正面玄関を見守るクスノキの葉をモチーフとし、緑のグラデーションで成長の変化、中央の空間でこれから生まれてくるものを表わし、全体として両手で優しく包み込むイメージのデザインとなっています。

巻頭言

「課題が多すぎる」を考える

副研究科長　南部　広孝

2020年初頭からの新型コロナウイルス感染症の流行により、大学の授業は一時ほとんどがオンラインで実施されました。2020年度後半には対面形式の授業が少しずつ再開され、現在、2021年度後期ではかなりの数の授業が以前のように対面形式で行われるようになっています。この間、大学教員の多くは、オンライン形式での授業実施や論文指導を経験し、京都大学ではPandAとよばれている学習支援システムを使って資料を提供したり課題を提出させたりするやり方を覚え、教室で定期試験が行えない状況での成績評価のしかたを考えることになりました。こうしたことは以前でもできたはずですが、コロナ禍で本格的に進められました。

このような中で学生から挙がった声の一つは「課題が多すぎる」でした。これまで「学生の自主性を重んじていた」ところでは、学生からすれば、急にたくさんの科目で課題が課されるようになったとか、ある科目の課題がむやみに多いと感じられたかもしれません。また、オンライン授業への出席に加えて課題の作業もパソコンに向かって行うことで生活のリズムをうまく整えられなかったり心身の調子が崩れたりして負担を感じたということもあるかもしれません。他方、教員からすれば、必ずしも顔が見えず手ごたえの感じられない中で授業の内容がどれくらい学生に伝わっているかを確認したいという考えや、定期試験を行えない状況で学生から定期的に課題を提出してもらってそれを成績評価の材料に加えたいという考えがあったと思います。

比較的よく知られているように、「大学設置基準」では、「各授業科目の単位数は、大学において定めるものとする」としたうえで、「1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準」とするとされています。そして、例えば「講義及び演習については、15時間から30時間までの範囲で大学が定める時間の授業をもって1単位とする」などと定められています（第21条）。この規定に基づくと、週1校時の講義科目や演習科目が2単位であることは、その単位の修得に必要な90時間の学修のうち30時間（1回2時間×15回）を授業時間に割り当てるとすれば、それ以外の60時間分は授業外の学修に充てられることを意味します。単純に、毎週授業と同じ時間（2時間）ずつ予習と復習をそれぞれ行えばこの時間数に達しますが、実際には学期末に試験があったりレポートの作成が求められたりしてその準備や作業にかける時間もありますから、毎週必ずそれだけの学修量がないといけないということにはなりません。

単位に対するこのような考え方をふまえると、履修した科目で授業に出席することに加えて毎回課題が出されそれをこなすことは大学での学修としてごく当たり前だということになります。そうは言っても、こうした単位の考え方がこれまで学生にていねいに説明されていたわけではないでしょうから、学生からすればオンライン授業の実施に伴って授業外でやるべきことが突然増え、それを負担に感じたであろうことは想像がつきます。この点については、大学での学修のあり方や授業の取り組み方、その基礎にある単位の考え方を学生にしっかりと説明して理解してもらうことが必要でしょう。

一方教員の側も、学期末に課していた試験の準備やレポートの作成に必要な時間数や、毎回の授業に関連して与える課題の分量などをこれまでこうした学修量として考えて設定していたかと言えば、必ずしもそうではなかったように思われます。今回の経験は、毎回の課題としてどれくらいの分量を課すのか、それとの関連で学期末の試験の準備やレポートの作成にどれくらいの学修量を想定するのか、そして全体としてどのような成績評価を行うのかといったことに改めて目を向けるきっかけになりました。また、課題を含む授業外の取り組みを充実させようとすれば教員もこれまで以上に教育活動に時間をかけることになりますから、教員の仕事の時間配分を見直すことにつながる可能性もあります。

授業の実施形態が以前のように対面形式に戻るとしても、定期的に課題を出すことの教育的な効果が改めて実感できるようになったとすれば、今回の経験を経て授業の進め方や学生の学修には変化が生じるように思われます。学修を時間数という量でとらえることの是非はさておき、個々の教員がそうした基本的な考え方をふまえながら自らの授業や教育課程を考え、それを教員同士、また教員と学生の間で共有することで、大学の教育を全体としてより望ましいものにしていくことができるのではないでしょうか。

教員から

徒然草と個人差と複雑さと

教育認知心理学講座
准教授
髙橋 雄介

『徒然草』を読みました。吉田兼好はお隣の吉田神社の神職の家系出身者の可能性があると知り，急に身近に感じたためです。徒然草の根底に在るのは無常観と言われますが，これは厭世的な無常観ではなく，現世は遷い，未来は不透明なので，殊に今が大事であるという前向きな無常観です。鎌倉時代からVUCAを説いているのです。2年前に誰がこの災禍を想像したでしょうか。長いこと飛行機に乗っていません。wanderlustが止まりません。日曜放送の『世界遺産』を欠かさずに見ています。不定期放送になってしまいましたが，『世界はほしいモノであふれている』も欠かせません。結果として余計にwanderlustが止まりません。番組を見ていると世界は広しと強く感じさせられます。多様な文化，様々な個人が存在しています。私の研究の興味・関心の中心はその個人差です。個人差が存在すること自体は理解できますが，それらがなぜ存在するのか，どのように存在しているのかが分かりません。帰巣本能があると言われる鳩ですが，1羽のみで一直線に巣に戻ることは難しく，一度に飛ぶ群れの個体数が増えると帰巣可能になるそうです。多様な個体が集まることで個体差が平均化され，収束的な解へと導かれる集合知を感じさせます。人間の場合はどうでしょうか。Leung et al. (2008, American Psychologist) は，集団内における多様な個人の存在は集団としての拡散的思考（創造性）を促進する可能性があることを示しています。しかし，社会や文化など集団として創発される結果に個人の意思決定はどのように関与しているのか，個人間ではどのような相互作用が起こっているのかなど，人間の認知行動過程は計量的に実に複雑であり，興味が尽きることはありません。心理学の基礎研究は，その複雑性を敢えて単純化し，その機序を部分的にでも詳細に記述することによって一定の科学性を維持してきましたが，一方で，複雑なものは複雑なままに見てみることも大切なのではないのかと感じています。

院生から

私にとっての音楽と心理臨床

臨床心理学講座
博士後期課程2回生
松本 知香

私は大学院に進学する前の4年間、オーケストラに所属し様々な音楽を演奏しました。複数人で音楽を演奏するときには、自分の譜面を追うだけでなく、全体の音を聞いて調和することや全体として一つのまとまった音楽を作ることが必要になります。これは少人数でのアンサンブルよりも大人数のオーケストラの方が難しくなります。当時、オーケストラ初心者の私は先輩から口酸っぱく、“近くの音ではなく遠くの音を聞く”よう言われていました。しかし全体の調和を意識するあまり、演奏技術が未熟な私は調和を乱さないように苦手な箇所で引っ込んだり、芯のないぼんやりした響きだけで奏でたりすることが多くなっていきました。そんな中気づき始めたこと、それは、ただ混ざり合ってきれいなハーモニーを奏でてもその音楽の良さは十分に発揮されないということです。どの音もその曲に必要な音であり、奏者一人一人が意志を持って個性を発揮して演奏することで生きた音楽になるのだと思います。これは心理臨床においても同じではないかと思います。様々な現場において、その対象が大きくなればなるほど“遠くの音を聞く”すなわち俯瞰する視点を持つことは重要であり、かつ非常に難しいことです。しかし心理職としてクライエントさんと接するときには、ただ俯瞰するだけでなく、一人の人間として個性を発揮していくことが必要なのではないかと感じるようになりました。そのためにはまず、自分と向き合い自分を知っていかなければなりません。奏者としての私は、自分の音と向き合う作業が苦しくて、音楽から距離を置いてしまいました。心理臨床においても、自分と向き合う作業は苦しいものです。でも今は逃げずに向き合い続けたいと思っています。私にとっての心理臨床の世界はまだまだ始まったばかりで先の見えない毎日ですが、自分にできることから一歩ずつ歩んでゆきたいと思います。

社会人院生から

音楽バカだけにはならないで

教育・人間科学講座
修士課程2回生
田添　茜

小学生だった私が、当時のピアノの師から贈られた言葉だ。頷いて見せた弟子だったが、中高時代になると、ピアノに飽き足らず曲を作り始めた。特段クラシック音楽に熱中した訳ではない。ただ、まっさらな五線紙の上に音を紡ぎ出す自由さに夢中だった。

東京藝術大学の作曲科に進んだ私は、大学生活の大半を声楽家との時間に費やした。今度は伴奏者として人と共に音楽をすることに夢中になったのだ。二人の息遣いが重なると、音はまろやかな孤を描いて楽譜から飛び出し空間を包み込む。他者と共に音を生み出すことを通して、私は「音楽する」ことを初めて肌で体感した。

幼い頃より恩師に恵まれた私は、いつか自分も教師になりたいと思っていた。この自分の体験した「音楽する」ことを伝えたい。けれどどうやって？今の私はどんな環境にいる人にもそれを伝えることができるか？まさにこの思いが、私を教育哲学のゼミへ導いた。

ある一定の認識が共有されている音楽専門の世界で生きるままでは、見えないものがある。音楽を客観的に眺め、誰もが多様な形で音楽を楽しむ、今の時代ならではの音楽との向き合い方を見つけ、言語化しなければ、私は人を選ぶ教師になってしまう。

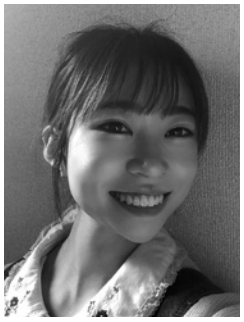
人が変容していく、という広い意味で「教育」という言葉を捉えるゼミには、様々な分野から人が集まり、それぞれ持ち寄った問いに意見を交わし合う。今まで考えたこともないような視点から意見を投げかけられ 、毎度音楽が私の中で姿を変えていく。

現在、ピアノ講師として子供から大人まで様々な方と巡り会うが、実のところ皆が皆「ピアノ」を好きな訳ではない。ただ、みんな「音楽」がしたい。「ピアノ」を教えることよりも、ピアノを介して「音楽」を共有することが大切だと気付かされる。弾けない、分からないと葛藤する生徒たちにあれやこれやと言いながら、実は私が一番刺激を受けている。

師は若くして他界した。いつか会えたら笑って言ってもらいたい。「予想以上の音楽バカになったのね」と。

留学生から

大好きなロリータ・ファッションを社会学する



教育社会学講座
修士課程1回生
馮　可欣

「大好きなロリータ・ファッションを研究テーマにするなんて、一番幸せなことじゃん」と久しぶりにあった大学時代の友人に言われたとき、とても誇らしい気持ちになりました。

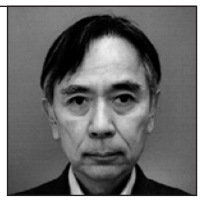
幼い頃から日本のカワイイ文化に親しんだ私は、大学3回生の時交換留学生として来日しました。そこで出会ったロリータ・ファッションに一目惚れして、ロリータとして日々を過ごしていきたいと両親や友人に宣言しました。ある日の授業後、先生に話しかけられました。「ロリータを着る子は、見た目はかわいいですが、心は強いですね。だから馮さんは強い。」それを聞いてそうなのか、と驚きました。資料調査を進めるにつれて、日本の文脈におけるロリータ・ファッションは「女」をしすぎる姿で、男性中心の社会によって押し付けられたジェンダー規範を攪乱するための「戦闘服」であることに気づきました。ちょうど同じ時期の中国にはロリータ・ファッションは少女文化の一つの柱として爆発的な人気を博していました。しかし、日本のロリータ文化と違って、中国のロリータは「かわいい」や「少女」など女らしい言葉と関わったもので、「戦闘服」から距離を置いた存在です。二つのロリータ文化に触れた私は、「ロリータとは一体どのようなものなのか」と深掘りしたい衝動を感じました。その経験を踏まえて、少女文化の研究拠点である京都大学へ進学しました。

文献調査と研究が進むにつれて、近年の中国社会に登場したロリータ・ファッション文化にハマる女子大学生は、「少女」を再定義し「少女である自分」を再創出してロリータ少女共同体を構築しようとしていることに気づきました。その背後に潜んでいるのは、女子大生の理想的な女性像そのものです。中国のフェミニズムの文脈において、「少女」と自称することで、主体性と当事者性を強く打ち出したことには、女性は異性に見られ、定義され、値踏みされる存在だというジェンダーの非対称性を揺るがす可能性を見込んでいます。現在は中国のロリータ文化が持つフェミニズム的な可能性を掘り出して、中国の少女文化研究の第一声を発したいです。

附属臨床教育実践研究センターから

附属臨床教育実践研究センターの活動

連携教育学講座　教授
附属臨床教育実践研究センター長
岡野　憲一郎



今年で開設25年目となる附属臨床教育実践研究センターは、開設以来一貫して、市民に開かれた心理教育相談室での心理臨床実践を中心に活動しています。心理臨床実践活動においては、スタッフ一人ひとりが目の前にいる来談者に真摯に向き合いながら、同時に、心理教育相談室という場のあり方についても細やかに考え、心理教育相談室での相談活動にあたっています。また、そうした臨床実践に根差した知を社会に還元する活動として、毎年「リカレント教育講座」と「公開講座」を開催してきました。

今年度も7月に第24回リカレント教育講座を、そして秋にはユング派心理療法家のアレクサンダー・エスターホイゼン先生を講師にお招きした公開講座を開催すべく準備を進めておりました。しかしながら、新型コロナウィルス（COVID-19）感染拡大防止の観点から、今年度についても開催を見送ることといたしました。いずれの講座においても、これまで多くの方々にご参加いただいておりましたので、大変残念ではございますが、参加される方々の安全面を最優先したうえでの判断であることをご理解いただけますと幸いです。なお、来年度につきましては、様々な可能性を考慮しながら、開催に向けて準備を進めているところです。

東日本大震災以降、当センターでは「こころの支援室」を開設し、震災に関連して関西圏に避難・移住されてきた子育て世帯への支援活動を継続して行ってきましたが、こちらも新型コロナウィルス感染症（COVID-19）の影響により、残念ながら活動を休止せざるを得ない状況が続いております。震災から10年以上が経過し、参加者それぞれが抱えておられる困難の形も個別化してきているなか、これまでの参加者同士のつながり、スタッフとのつながりを大切にしながら、新たなつながりの輪を作っていく機会を模索していきたいと考えております。

教育実践コラボレーション・センターから

コロナ後の教育を見据えて

教育社会学講座 准教授
服部 憲児

教育実践コラボレーション・センターは、昨年度より２つの学内経費（GAPファンドプログラム「ポスト・コロナの初等中等教育におけるICT活用に関する研修プログラム開発と具体的提言」および全学経費「ポストコロナ時代における教育問題解決に向けた学校支援の展開」）を得て、コロナ後の新しい教育の展開、そこで必要とされる学校や教育委員会への支援を念頭に置いて活動を行ってきました。

まず、学校現場におけるICT活用を支援するICT活用サポーター（学部生・大学院生が担当）の育成と、本センターが連携している学校や教育委員会に対して支援を提供する活動を行い、その成果をまとめて発表会を行いました。

また、この取り組みや連続研究会（「E.FORUMの取り組み」参照）の成果をふまえて、コロナ後の教育を見据えて２つの提言を出しました。１つはGAPファンドプログラムにかかわるもので、「学校教育における ICT 活用の在り方―公正かつ魅力的で効果の高いポスト・コロナの教育の実現に向けて―」です。もう1つは全学経費にかかわるもので、「ポストコロナ時代における新たな学校モデル」です。

さらに、これらの活動やこれまでの取り組みから得られた知見、研究の成果をふまえて、最近10年間の教育改革を概括した書籍、『検証 日本の教育改革―激動の2010年代を振り返る』（学事出版）を刊行しました。ぜひ御一読お願いしたいと思います。

なお、ここで紹介した活動の詳細については、本センター・ホームページ（http://collabo.educ.kyoto-u.ac.jp/center/）およびE.FORUMホームページに掲載されています。

先が見通しにくい時代ではありますが、これまで培ってきた研究やネットワークを活かしつつ、今後も教育現場が直面する諸問題に対して、教育学研究科としての組織的な対応をコーディネートする役割を果たしていければと思います。

グローバル教育展開オフィスから

「『日本型教育』を再考する：東アジアとの対話を通じて」

グローバル教育展開オフィス　室長
高山 敬太

前回のニュースレターにおいて、本年度のウェビナーシリーズ「『日本型教育』を再考する：東アジアとの対話を通じて」について予告しました。東アジアの教育研究者で、東アジアという地域共通性の視点から教育研究を捉え直そうとされている方々からお話を伺うことで、「日本型教育」—これは昨年度のウェビナーシリーズのテーマだったわけですが—を再考するという趣旨です。今日までに、予定されている全5回の講演中2回までが無事終了しました。オンラインで、日米同時通訳を付けて行っていますので、学外の方や、海外の方にも多く参加していただいております。

先日10月29日の第二回目の講演は、韓国の晋州教育大学校のYoung Chun Kim先生と全北大学校のJung-Hoon Jung先生による「影の教育の世界的な流行と東アジア諸国の学力達成：公教育を超えた教育熱を理論化する」という講演でした。「影の教育」とは、Shadow Educationの訳ですが、端的に言えば、日本で言うところの塾、韓国で言うところの学院(ハゴォン)のことを指します。正規の学校を教育の「光」の部分とすると、その対概念としての「影」という位置づけです。この影の教育が世界中に拡散していると同時に、それが一つの産業として最も確立した東アジアの教育の達成度が、OECDのPISAなどから明らかになったことは良く知られています。お二人の講演は、この状況から、東アジアの研究者が教育理論を作り上げる上での一つのヒントを与えてくれました。

まず、二人が強調されたのは、Shadowという表現に象徴されるように、塾や学院にまとわりつく否定的なイメージを問い直すことの必要性でした。これなしには、東アジアの教育にまつわる否定的なイメージの払拭は難しい、そして、そのための方法として、子どもの視点から学校内外の教育経験を見つめ直すことを提唱します。すなわち、韓国のように、多くの時間を学院にて過ごす子どもたちにとっては、通常の学校が光で、学院が影という感覚すら存在しておらず、じつはどの教育経験も陸続きの地平に存在している。子どもたちは学校の内外で起きているさまざまな教育経験を主体的に選び取り、自らの教育を作り上げていると見立てることで、光と影に二分する研究者の視線、そして影の部分を否定的に捉えるバイアスを乗り越えることができると論じました。今日の日本の教育状況を考える上でも、非常に示唆に富んだ講演だったと思います。次回は、新年の1月14日にシンガポール教育研究所のYanping Fang先生をお迎えして、東アジアの教員文化についてお話しいただきます。皆様のご参加をお待ち申し上げております。

トピックス

「日本型」教育文化・知の継承支援モデルの構築と展開プロジェクト

教育認知心理学講座　教授
齊藤　智

約半世紀前に私が通っていた小学校の昼食は、学校給食でした。給食当番になると、白いエプロンを着て配膳したものです。全員が着席し、学級当番の音頭で「いただきます」と唱えてから食事の時間がようやく始まります。この風景は、今も変わらず日本の小学校で見ることができるようですが、他国でも同じというわけではなさそうです。米国の研究者が京都に滞在された際に、一緒に来日した御子息2人は、京大近くの小学校に通いました。登校初日のことです。給食準備中に、他の子はまだ待っているのに彼らは食べ始めてしまい、少々気まずい雰囲気になったと聞きました。

さて、マシュマロテストという課題をご存知でしょうか。目の前にある1つのマシュマロをすぐには食べないで待っていたら、後でもう1つもらえるという設定で、子どもがどれだけの時間待つことができるのかを調べる米国で開発された課題です（実際の手続きは少し違いますが、ご了承ください）。4歳の頃に待つことのできた時間の長さから十数年後の学業成績や30年後の健康状態が予測できることが報告されたことを受けて、日本でも「セルフ・コントロール」の課題として紹介されています。東京大学研究員の柳岡開地さんが中心となって、日米比較を行ってみたところ、マシュマロを報酬とした場合には日本の子どもが圧倒的に長く待つこと、食べ物以外を報酬とした条件では、逆に、米国の子どもが長く待つことがわかりました。私たちは、学習の結果身についた習慣に注目し、「集合的セルフ・コントロール」という概念を提案してこの結果を説明しようと試みました。日本の幼稚園・保育所や家庭での食卓習慣に関する先行研究を参考に、タイミングを定めて食べ物を口にするという習慣が、日本では幼い頃から培われていると想定したのです。「集合的 (collective)」という語の履歴について、しつこく尋ね回った私につきあってくださった皆様、どうもありがとうございました。

E.FORUMの取り組み

2021年度E.FORUMの取り組み

教育・人間科学講座　教授
西岡 加名恵

E.FORUMでは、昨年度に引き続き、オンライン研修を中心として様々な活動に取り組んでいます。

7・8月には、「スクールリーダー育成のためのオンライン・リレー講座」をオンライン同時配信で開催しました（京大オリジナル株式会社との共催。講師は、楠見孝教授、石井英真准教授、服部憲児准教授、西見奈子准教授、明地洋典准教授、西岡が担当）。全5回の研修に、延べ266名の方がご参加くださいました。

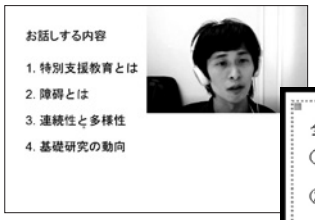
教育評価に関しては、昨年度に引き続き「教育評価の基礎講座」を配信する（今年度は136名が受講）とともに、新たに「教育評価の実践講座――パフォーマンス評価をどう活用するか」を提供しています。オンデマンド講義と同時双方向の研修を組み合わせたもので、延べ78名の方がお申込み下さっています（8～11月に実施）。

また、2020年9月から2021年12月まで、学内基金（GAPファンド臨時プログラム）によるプロジェクト「ポスト・コロナの初等中等教育におけるICT活用に関する研修プログラムの開発と具体的提言」に取り組んでいます。全17回の連続研究会を開催する（延べ1598名が参加）とともに、学校現場等との共同研究にも取り組みました。それらの成果を発信するサイトを構築し、成果をまとめた提言の作成に取り組んでいます。さらに、オンライン研修「学校教育におけるICT活用の基礎講座」のコンテンツを開発し、9月からオンデマンド型で配信を開始しています（京大オリジナル株式会社との共催。講師は、南部広孝教授、本研究科博士後期課程 張潔麗さん、石井英真准教授、西見奈子准教授、開沼太郎准教授、久富望助教、西岡が担当）。

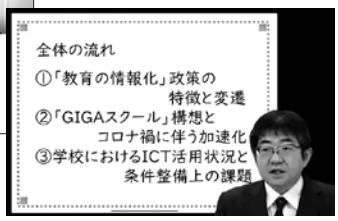
休校期間中に在宅学習を進める子どもたち（や保護者・先生方）への支援を目的に昨年5月に開設した「子どもたち応援サイト」も更新を続けています。

以上の活動の詳細は、

E.FORUMホームページ（https://e-forum.educ.kyoto-u.ac.jp/）をご覧ください。



▲【スクールリーダー育成のためのオンライン・リレー講座】



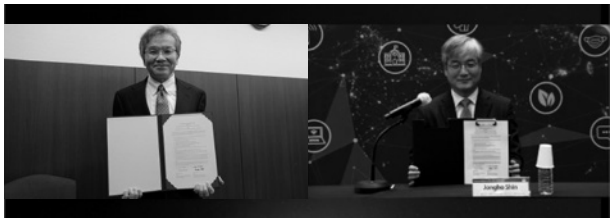
▼【学校教育における ICT活用の基礎講座】

国際交流事業

ソウル大学校師範大学との交流協定延長の報告

グローバル教育展開オフィス　室長
高山 敬太

10月22日に本研究科は、以前から交流実績のあったソウル大学校師範大学教育学科（以下、ソウル大学校）と、部局間の学術交流協定を延長いたしました。最初に協定が結ばれたのが10年前の2011年11月で、その後2016年11月に最初の協定延長があり、今回は2度目の延長でした。これまでの10年にわたる交流の歴史を振り返ってみますと、とりわけ、協定が結ばれた最初の5年間は、ほぼ毎年何らかの交流行事が催されており、特に、教育方法学の先生と院生を中心に活発な交流が行われていました、ですが、2016年の更新以降は、交流活動が若干下火となり、とりわけ目立った活動は行われてきませんでした。この度の協定延長を見越して、本年8月に楠見研究科長と先方の学部長であるJongho Shin教授との間で話し合いがもたれ、交流を活性化することを前提に協定延長の合意に至りました。この話し合いにおいて、2016年の最初の協定延長の際に、ソウル大学校の先生方が当研究科を訪問されたこと、そしてその時の本研究科のおもてなしに関して、Shin学部長から丁重なお礼のお言葉をいただきました。また、この話し合いの場において、本年度の交流事業として、ソウル大学校が毎年主催しているInternational Conference for Educational Research (ICER)において、協定延長を記念するセッションを企画することをShin学部長からご提案いただきました。今回はオンラインの開催でしたが、当研究からは石井英真准教授がコロナ禍における日本の学校教育の現状と課題について、そしてソウル大学校からは、Sun-Geun Baek教授が、人工知能の時代の教員養成のあり方について講演していただきました。その後、楠見研究科長とShin学科長から提携延長に関する祝辞をもって閉会いたしました。そのほか、ICERの特別セッションにおいて、私がコロナ禍を起点に教育を再創造する可能性について講演する機会をいただきました。東アジアを代表する大学の一つである、ソウル大学校との研究交流が、今後さらに活性化することを期待します。



言葉の形

事務長
廣中 理絵

教育学研究科に来て半年が過ぎました。事務長室は打ち合わせスペースも兼ねた一室で、春から夏にかけてはドアも窓も開け放し、事務室職員の声や出入りの業者さんの台車の音、窓からは学生さんの声も聞こえてきます。

4月は学生さんや先生が事務室の窓口やカウンターにたくさん来られていました。手続きや問い合わせの声が飛び交い、活気ある教育研究の現場を実感しました。しかし、それもつかの間、5月にはコロナ感染状況が悪化して、活動制限レベルの引き上げに伴い授業や会議はオンラインで実施されるようになりました。そして今は、対面とオンラインの良いところを取り入れた新しい方法が模索されています。

私たちは、何かを伝え、知るためには言葉を使いますが、それは声に出すものだったり、文字にするものだったり、また、紙に書いてあったり、画面上に現れるものだったりします。同じ言葉でも伝わり方は一つではなく、言葉にはいろいろな形があるのだなと思います。立体、でこぼこ、やわらかい、かたいなど様々です。コロナ禍においては、言葉を、書かれた文字で見ることが多いですが、その場合は声で聞くよりも、より複雑な形になってしまうように思います。そんな時は、電話や対面で声にすることによって、角がとれて相手との形がしっくりとあうようになる、そんなふうに感じたことが何度かありました。

コロナ禍を経験することにより、コミュニケーションの方法は様変わりしました。これまでと同じようにしていると、気づかないうちに言葉の形が相手とあわなくなってしまい、なんとなくぎくしゃくしてしまうということもあります。言葉の形や使い方を少しだけ意識することで、うまく思いを伝えられるのではないでしょうか。

季節は秋になり、だんだん風が冷たくなってきましたが、やわらかくてあたたかい言葉のやりとりがたくさんある、安心して過ごせる環境をつくっていけたらいいなと思っています。

大学職員になろうと思ったきっかけ～少しだけ人生の先輩から～

教務掛員
奥村 悠人

私が本学の大学職員として働き始めてこの4月で6年目となりました。なぜ大学職員の仕事をしたいと思ったのかをこの機会に振り返ってみました。教員免許の取得と並行して、就職活動をしていく中で、「教育関係の仕事に就きたい。」という1つの軸が自分自身の中で生まれました。そのきっかけというのは、部活動や今まで出会ってきた先生方などからご指導いただいたことを継承していきたいと思ったからです。

教育現場の経験として教育実習をさせていただきました。個人的な意見ですが、3週間という短期間で教科の知識や授業の技量が向上したのではなく、HRや休み時間に積極的に生徒と関わることで生徒の成長を身近に感じられたことが一番の経験となっています。成長というのは、生徒の言動などから感じ取れました。当時から社会人になった今でも大事にしている言葉があります。【目配り・気配り・率先】。このことを常に念頭において、行動することによって、自然と自分自身の視野も広がり、色々な世界が見えるようになりました。特に、教育、学びの環境下において見えないところで大勢の人が携わっており、支えてくださっている人が沢山いるということがわかりました。心から感謝すべきことです。

他にも多くの経験をさせていただき、縁があり本学で働くことになりました。大学というのはこれからの社会で活躍する【人財】を育成する場であると思っています。学生の皆さんは今後社会に出て、様々な困難や危機と思われることが沢山出てくると思います。

そこでは必ず多くの成功や失敗を経験します。失敗から反省し学ぼうとすることも大切ですが、特に成功した時に、なぜ成功したのかを考えるようにしてみてください。

最後になりましたが教務掛・教職教務掛では、今後も学生の皆さんに最高の学生生活が送れるようにサポートしていきたいと思います。

コロナ禍のなかの図書室のとりくみ

図書掛長
中尾 佳樹

新型コロナウイルス感染症の感染拡大第一波からすでに一年半以上が経過し、その間、教育学部図書室も臨時休室を含むサービスの中止や縮小を余儀なくされてきました。本稿執筆時点（2021年10月下旬）においても、閲覧席の利用は一部再開しているものの、感染拡大予防のため席数を通常時の半数以下に減らすとともに、図書室内の長時間滞在をできるだけご遠慮いただくようお願いしている状況です。

図書室が果たすべき大きな役割として、「場所（学修環境）の提供」と「資料の提供」ということが挙げられますが、新規感染者数が急激に減少しつつあるとはいえ、第六波の到来に向けて引き続き警戒が必要といわれている現況において、閲覧席の利用制限を撤廃するなど、前者の役割に係るサービス内容をコロナ禍以前の水準にまで回復させるのは時期尚早と思われます。他方、後者の役割については、第一波以後の早い時期から、学生への貸出冊数を通常時の二倍に増やすなど、授業が原則オンラインになり登校の機会が減った場合でも、資料の利用にできるだけ不利益が生じないよう努めてきました。また、電子ブックなど、図書室への来室を伴わずに利用できる資料の充実にも力を入れ始めています。これまでに当図書室が購入して全学の利用に供している電子ブックは73タイトルで、当図書室の全所蔵冊数約19万冊や、全学提供されている電子ブックの総数約7万タイトルに比べると、まだ微々たる数にすぎませんが、利用に空間的・時間的制約が少ない（図書室に行かなくても、図書室が閉まっていても利用できる）という利点や、書庫狭隘化の進行緩和にもつながるという利点を考慮して、今後も積極的に購入を進めたいと考えています。電子ブックは、KULINE（京都大学蔵書検索）や図書館機構サイトの電子ジャーナル・電子ブックリストから検索・閲覧できますので、是非ご活用ください。

大学院・学部学士入学　入試説明会

令和3年6月26日（土）にオンライン（Zoom）上にて、大学院及び学部学士入学入試説明会（コース別相談会）が開催された。

例年であれば京都大学吉田キャンパス及び京都大学東京オフィスにて開催されているが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、今年度はオンライン（Zoom）上での開催となった。

まず、岡邊健　教務委員長による入試ガイダンス（全体説明）を行い、その後のコース別個別相談会は、13時45分から15時25分まで実施した。

コース別相談会では、担当教員、大学院生相談員の学生と受験希望者との間で意見交換等が行われ、いずれの相談会でも受験希望者が熱意を持って参加していた。

オープンキャンパス2021

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、2021年度オープンキャンパスは、昨年度同様、インターネットを活用して実施した。

楠見学部長のご挨拶、学部概要と特色入試のスライド説明、梅村高太郎講師と竹内里欧准教授による模擬授業、学生2名による「学部生からの応援メッセージ」の動画を2021年7月30日から2022年1月末まで特設サイトに掲載する。

また、高校生に向けて、本学部・研究科の学生に質問や相談が出来るオンライン相談会を実施した。

令和3年度教育学研究科長賞・教育学部長賞

学生表彰選考委員会委員長・研究科長
楠見　孝

この度、令和３年度京都大学大学院教育学研究科長賞ならびに教育学部長賞の選考の結果、教育学環専攻教育認知心理学コース3年の高野 了太（たかの りょうた）さんと教育科学科現代教育基礎学系4年の松岡 巧（まつおか こう）さんが、受賞者に選ばれました。誠におめでとうございます。

この賞は平成24年度に創設され、(1)学業、(2)課外活動、(3)社会活動などの分野で優れた成果を上げ本部局の名誉を高めた学生、(4)その他、本表彰に相応しいと認めた学生に対して賞を授与するものです。本研究科・学部の教職員および学生であればだれでも推薦することができます。今年度から自薦も可能となりました。

10回目を迎えた今年度は、推薦期日の令和3年9月30日までに、計2名の推薦がありました。以下、選考経過と選考理由を簡単にご報告します。

まず、学生表彰選考委員会（委員は楠見 孝 研究科長、佐藤 卓己 副研究科長、南部 広孝 副研究科長、岡邊 健 教務委員長、西岡加名恵 学生委員長）において、推薦を受けた候補者について慎重に協議・検討しました。その結果、高野さんと松岡さんを受賞にふさわしい成果を有すると判断し、それぞれ研究科長賞・学部長賞受賞者として決定しました。

高野 了太さんは、国内外で広く関心の寄せられている高次感情（畏敬の念）に関心を寄せ、そのメカニズムについて、心理学を基盤としながら人間の生体に関わるシステム神経科学を融合した学際的アプローチにより優れた研究知見を得てきました。国際的な研究者間の交流にも積極的に参加、成果発信に努め、その成果は、査読付き学術論文として心理学の感情研究におけるトップジャーナルの一つであるEmotion誌を含め、国内外の主要な査読付き学術誌に４報掲載され、また、日本心理学会第８３回大会において学術大会優秀発表賞を授与されるなど、学業の観点から本研究科の名誉を高めることに大きく貢献しました。

次に、松岡 巧さんは、青少年更生保護ボランティア団体「京都BBS連盟」に所属し、非行少年の立ち直り支援、子供たちへの犯罪未然防止活動、不登校児童の支援等様々な活動を行い、少年院や少年鑑別所での学習支援、家庭裁判所や児童自立支援施設でのボランティア活動に携わり、「京都保護観察所所長感謝状」を受賞しました。

また、広報活動にも力を入れ、2021年2月に、京都で開催された「第14回国連犯罪防止刑事司法会議ユースフォーラム」にBBS連盟の代表として参加し、発表を行うことにより、日本の更生保護制度の有効性、BBS連盟の活動内容やその意義を日本のみならず世界に向けて発信するという功績を収めました。

さらに、松岡さんはBBS連盟の活動以外にも、こども食堂の運営と拡大、留学生への日本語、生活支援など、様々な社会活動を通じて、本学部の名誉を高めることに大きく貢献しました。

お二人が今回の受賞を機に、今後ますますご活躍するよう願っています。

教育学研究科長賞

博士後期課程3回生
高野 了太

この度は、教育学研究科長賞という栄誉ある賞をいただき、大変光栄に感じております。ご指導いただいている先生方、院生の皆様、事務の方々含め、多くの人に私は支えられております。日々感謝を忘れないようにしておりますが、この場をお借りして改めて皆様に御礼申し上げます。

私はこれまで、宇宙や雄大な自然を感じたときに生じる「畏敬の念」について研究してきました。「畏敬の念」は人文科学で古くから扱われてきましたが、私はこれを自然科学の俎上に載せ、心理学・生理学・神経科学等の手法を組み合わせることで、立体的に描くことを目指しました。こうした試みを通じ、一つの学問的視点 (レンズ) では隠れてしまう部分も、別のレンズからピントを合わせることで見えてくることを学びました。このような統合的なヴィジョンを持つことができたのも、教育学部・教育学研究科の環境あってこそのものだと思います。

今回の受賞を励みに、今後も皆様に良いご報告ができるようこれからも精進したいと思います。この度は本当にありがとうございました。

教育学部長賞

教育学部４回生
松岡　巧

この度は教育学部長賞という名誉ある賞を賜り、誠に光栄に存じます。関わってくださっている全ての方々に感謝の気持ちでいっぱいです。

中学生の頃に「教育」に興味を持ってから、誰かの役に立つようなことをしたいと思っていました。しかし中高の間は自分のことで精一杯で、大学に入ってからやっとボランティア活動に取り組むことができました。

ボランティアを始めたばかりの頃は、「こんなにも自発的に社会の役に立つようなことをしていて、自分はなんて偉いんだろう！」と得意げでした。しかし、社会の役に立つことはボランタリーなことばかりではありません。世の中で働いている人は皆何かの役に立つようなことをして生計を立てています。私が誇らしげに思っていたボランティアは、実は何も特別ではないちっぽけなモノだと気付かされました。

でもそんなちっぽけなモノだからこそできることもあります。一見無駄に見えるようなことをとことん追い求めることで、そこに小さな可能性を見つけることができるのです。

「小さなものへの大きなまなざし」が私のモットーです。頂いた賞に恥じないよう、これからも謙虚に、一歩づつ取り組んで参りたいと思います。

諸記録

人事異動（2021.5.1～2021.10.31）

【令和３年７月16日】

藤村　達也	助教（教育学研究科付）	採用

【令和３年７月31日】

	事務補佐員（教育認知心理学）	退職

【令和３年９月３０日】

大庭　弘継	研究員・教務補佐員（地域連携教育推進ユニット）	退職
	派遣職員（教務掛）	任期満了

【令和３年10月１日】

岡邊　健	教授（教育社会学講座）	昇任
	事務補佐員（教務掛）	採用
	事務補佐員（図書掛）	採用
張　潔麗	研究員（地域連携教育推進ユニット）・事務補佐員（教育実践コラボレーション・センター）	採用

【令和３年10月31日】

	事務補佐員（グローバル教育展開オフィス）	退職

諸記録

主な出来事（2021.4.1 ～ 2021.10.31）

4月23日（金）
令和3年度 膳所高等学校 高大連携事業 京都大学特別授業（前期）
総合・人間科学Aコース『ひとのこころとからだの行動遺伝学』
高橋雄介 准教授　教育認知心理学講座
京都大学吉田キャンパス総合研究2号館

教育実践コラボレーション・センター E.FORUM
連続研究会「学校教育におけるICT活用」
6月5日（土）第15回連続研究会
「オンライン授業で学びを豊かにする　地方公立小学校における実践紹介」
鹿児島県阿久根市立尾崎小学校・教頭　山口小百合 先生
7月3日（土）第16回連続研究会
「熊本市が挑む教育 ICT プロジェクトとその先の未来」
熊本市教育センター・主任指導主事　前田康裕 先生
9月11日（土）第17回連続研究会
「学校教育におけるICT活用の在り方
――公正かつ魅力的で効果の高いポスト・コロナの教育の実現に向けて」
担　当：京都大学大学院教育学研究科・南部広孝 教授、西岡加名恵 教授、
石井英真 准教授、西 見奈子 准教授、服部憲児 准教授、
開沼太郎 准教授、久富 望 助教

教育実践コラボレーション・センター E.FORUM
オンラインコース「教育評価の基礎講座」2021
6月2日（水）第1回「2017・2018年改訂学習指導要領の特徴」　西岡加名恵 教授
7月7日（水）第2回「『目標に準拠した評価』の基本的な考え方」　西岡加名恵 教授
8月4日（水）第3回「パフォーマンス課題の作成」　西岡加名恵 教授
9月1日（水）第4回「ルーブリックとポートフォリオの活用」　西岡加名恵 教授
10月6日（水）第5回「2019年改訂指導要録のポイント」　石井英真 准教授

教育実践コラボレーション・センター E.FORUM
「スクールリーダー育成のためのオンライン・リレー講座」
7月3日（土）第1回「教育改革の最新動向と授業づくりの課題」　石井英真 准教授
7月17日（土）第2回「基礎研究者と考える特別支援教育」　明地洋典 准教授
7月31日（土）第3回「心のケアとはなにか―その歴史から考える―」　西見奈子 准教授
8月8日（日）第4回「教師の実践知獲得」　楠見孝教授
8月22日（日）第5回「教師が能動的に取り組む学校マネジメントをいかに実現するか」服部憲児 准教授

グローバル教育展開オフィス
2021年度教育研究グローバルキャリア最前線
7月30日（金）第1回「国際協力分野のキャリア：やりがいと自己実現」
講演者　塩畑　真里子氏（開発・人道支援コンサルタント）
8月5日（木）第2回「日本人が国際機関で生き抜いていく秘訣について」
講演者　松吉　由希子上級ドナーリレーションズ専門官（教育のためのグローバル・パートナーシップ：GPE）
8月27日（金）第3回　「途上国への教育支援と課題」
講演者　金澤 大介　上級教育専門官（Global Partnership for Education事務局）
9月1日（水）第4回「持続可能な開発」主流化のジレンマー ESDの変容と課題ー」
講演者　望月要子　政策プログラム長（マハトマ・ガンジー平和と持続可能な開発のための教育研究）

8月10日（火）～11月30日（火）

10月16日（土）

10月30日（土）

9月8日（水）
9月22日（水）
10月6日（水）
10月20日（水）

9月27日（月）

10月29日（金）

10月7日（木）～10月8日（金）

教育実践コラボレーション・センター E.FORUM
オンラインコース「教育評価の実践講座――パフォーマンス評価をどう活用するか」
（オンデマンド講義）
「『資質・能力』を育成するパフォーマンス評価」西岡加名恵 教授

【総合分科会】
「『総合的な学習（探究）の時間』の指導と評価
―ポートフォリオ評価法とルーブリックを中心に」
西岡加名恵 教授・京都市立堀川高等学校 研究部 部長　濵田 悟 先生
協力：京都市立堀川高等学校

（ライブ配信）
【教科別分科会】
「国語科におけるパフォーマンス課題とルーブリック」
大阪教育大学教育学部　八田幸恵 准教授
「社会問題の理解を深め、構想力につながる社会科のパフォーマンス評価」
追手門学院大学心理学部　鋒山泰弘 教授
「外国語（英語）科におけるパフォーマンス評価と授業づくり」
佛教大学教育学部　赤沢真世 准教授

教育実践コラボレーション・センター E.FORUM
オンラインコース「学校教育におけるICT活用の基礎講座」
第1回「学校教育におけるICT 活用の可能性と課題」西岡加名恵 教授
第2回「ICTを活用した授業づくり」石井英真 准教授
第3回「教育のICT 活用に関する臨床心理学的知見」西見奈子 准教授
第4回「『教育の情報化』政策と学校におけるICT 活用の課題」開沼太郎 准教授

グローバル教育展開オフィス
2021ウェビナーシリーズ
第1回
比較社会学における日本的特徴の理論と実証：教育の不平等に関する事例を通じて
講演者　多喜 弘文 准教授（法政大学社会学部）
第2回
Worldwide Shadow Education Epidemic and World-Class Academic Success in East Asian Nations: Theorizing Learning Fever Beyond Public Schooling
講演者　Young Chun Kim
Professor, Chinju National University of Education, South Korea
Jung-Hoon Jung
Jeonbuk National University, South Korea

教育実践コラボレーション・センター
小中高大連携：令和3年度福岡県立京都高等学校「京都研修」
京都大学吉田キャンパス

外部資金受入れ（2021.4.1～2021.9.30）

受託研究

研究題目	委託者	研究担当者
革新的イノベーション創出プログラム（COI STREAM）「活力ある生涯のためのLast 5Xイノベーション」拠点　女性と子どものこころとからだの健康サポート：育児サポート	国立研究開発法人 科学技術振興機構	明和　政子
総選挙における投票行動を通じて把握可能な個人-集団関係	公益財団法人　丸和育志会	楠見　孝

共同研究

研究題目	委託者	研究担当者
ガーディアンロボット開発のための心理学的研究	国立研究開発法人 理化学研究所	楠見　孝
パフォーマンス課題に取り組む授業のための様々なデジタル・コンテンツ	凸版印刷株式会社 教育事業推進本部	西岡　加名恵
会社組織としての好奇心に関する共同研究	キュリアスキャピタル株式会社	楠見　孝

寄附金

研究題目	寄附者	研究担当者
教育学研究科 E. FORUM 研究活動の促進のため	凸版印刷株式会社 教育事業推進本部	西岡　加名恵
「情報分野における専修学校と専門職大学院大学の教育史に関する調査・研究」のため	京都情報大学院大学	田中　智子
教育に対する価値観の比較文化調査	公益財団法人 村田学術振興財団	高松　礼奈

諸報

新任教員紹介

藤村　達也　助教
専門：教育社会学、
歴史社会学

戦後の大学大衆化が「受験」という現象と経験をいかに変容させたのかを社会学的に検討しています。どうぞよろしくお願いいたします。

訃報

江原　武一　京都大学名誉教授

江原武一先生は、令和3年9月2日に逝去された。享年80歳。
昭和40年3月東京大学教育学部卒業、同46年東京大学教育学部助手、同55年東京大学教育学博士。奈良教育大学教育学部講師、同助教授を経て、昭和58年4月京都大学教育学部助教授（併任）、同59年4月同専任、平成4年8月同教授、同9年4月教育学部教育学科長、同15年京都大学評議員、同17年京都大学名誉教授、立命館大学教授。先生は比較教育学に大規模データ解析による社会学的研究手法を取り入れ、同学の科学的実証性の確立に寄与された。日本比較教育学会、日本高等教育学会、日本教育社会学会などで役員を歴任され、学会の発展に大きく貢献された。謹んでご冥福をお祈りいたします。

教育学研究科・教育学部基金

ご寄附いただきました方々への感謝の意を込め、ここにご芳名を掲載させていただきます。
（公開をご希望されない方については、掲載しておりません。）

飯田　正敏　　髙橋　登　　河村　正　　廣瀬　直哉
白石　裕　　藤井　龍和　　森本　洋介　　松本　嘉一　　※50音順　※2021年9月末現在

ー未来の教育を創造するため、人間・社会についての世界最先端の研究を展開し、成果の社会還元を行うとともに、学生の教育環境の整備に取り組みますー

本研究科・学部は、1949年の創設以来、世界最先端の教育学研究とその研究者の養成、ならびに全学の教職教育の責任部局という責務を担いながら、これまで各界で活躍する有為な人材を輩出し、優れた研究成果を現場に還元することで社会の要請に応えてきました。

本研究科・学部は、学校教育はもとより、地域、家庭、職場など人が育っていくあらゆる場面を「人間形成」の場として探究しています。その中で、不登校・学習意欲不振生徒のための学校改善、過疎地域の地域振興などへの提言、教育委員会の指導主事など第一線の実践現場で働く人びとにとっての研修の機会を提供しておりますが、このような活動は、大学院生が現場のリアルな問題に触れながら自らの研究関心と手法を研ぎすますための教育の場でもあります。

近年、社会と連携したこうした教育研究活動の必要性が増す状況において、本研究科・学部が社会と連携しながら実践的な教育・研究を行うためには、安定した財政基盤が必要です。その礎の一つとして、2015年に「教育学研究科・教育学部基金」を設立しました。本基金では、研究の成果を現場（フィールド）に返し、また現場での課題を教育・研究に生かしていく、「理論と実践の往還型」の教育・研究という本研究科・学部の特色ある活動を維持するため、以下の活動に活用します。

皆さまのご協力をよろしくお願いします。

基金の使途：

項　目	具体例
(1) 教育支援	・学生のための図書・教材等の購入 ・学生関係居室の整備・維持管理 ・障害学生等のための学習補助者の雇用 ・学生・院生の海外派遣　など
(2) 研究支援	・研究活動基盤整備の支援 ・研究・学術資料の整備 ・公開講座・講演会等の開催　など
(3) その他事業支援	・京都大学教育学研究科シリーズ本の出版補助 ・修了生・卒業生との連携活動　など

詳細については以下をご覧ください。
http://www.kikin.kyoto-u.ac.jp/contribution/education/index.html

編集後記

ニューズレターをお届けします。昨年度より、新型コロナウイルス流行の影響で、仕事（授業や会議など）のオンライン化が急速にすすみました。感染状況がおちついている現在は、もとどおりの形態での仕事が（すべてではないですが）復活しつつあります。オンラインで授業や会議を行うことにより、資料の印刷の必要がなくなったり、移動にかかる時間が大幅に短縮するなど、効率的な面にも気づきましたが、ちょっとした雑談がしにくい不便さや寂しさなども感じました。他方、オンライン授業でのチャット欄上で行う学生とのコミュニケーションの面白さなど、新しい可能性も発見しました。今後、感染状況の変化をみながらその都度判断していく必要がありますが、対面とオンラインと双方の利点をとりいれた仕事のあり方を考えていきたいです。（竹内　里欧）

表紙によせて

10月7・8日に福岡県立京都(みやこ)高等学校の生徒30名が研修で本研究科を訪れました。本研究科はこれまでもSGHであった同校を支援してきましたが、今回の受け入れはその延長線上に行われたものです。新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、当初予定より計画を縮小して実施しました。初日は院生（同校卒業生）による講話、学部生との交流会を行いました。次々と手が挙がり時間いっぱいまで高校生の質問が続きました。2日目は3グループに分かれて授業見学を行い、いずれの授業もたいへん熱心に聞き入っていました。

（服部 憲児）

京都大学教育学研究科・教育学部広報委員会

委員長　明和　政子　　教授（教育・人間科学講座）
委員　竹内　里欧　　准教授（教育社会学講座）
委員　梅村　高太郎　　講師（臨床心理学講座）

事務担当
教育学研究科・教育学部総務掛　　ホームページ　http://www.educ.kyoto-u.ac.jp

125th ANNIVERSARY KYOTO UNIVERSITY
2022年、京都大学は
創立125周年を迎えます。

ガイドドッグペーパー
当印刷物の用紙費用の一部は
関西盲導犬協会に寄付されています